Osaka University Knowledge Archive

Title	「教育工学」特集号を企画して
Author(s)	石桁, 正士; 菅井, 勝雄
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1989, 73, p. 20-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65827
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「教育工学」特集号を企画して

石　桁　正　士（大阪電気通信大学）
菅　井　勝　雄（大阪大学）

本センターのニュースもいくつかの特集号か企画し、刊行してきたが、今回は「教育工学」の特集号とした。「教育工学」は、今やコンピュータを中心として展開されている観があるが、あえてＣＡＩ特集やＣＭＩ特集にはしなかったのは、やはり教育大学という概念の広さと何となく背景に哲学めいたのを感じるからであろうか。

現代の「教育工学」の中で、コンピュータは教育を推進させる大きな手段であるばかりでなく、コンピュータを通じて教育の基礎部分のひとつである人間の認識をも変えつつある。

このコンピュータを教育の中で活用する場合の枠組みとしては、ＣＡＩ（Computer Assisted Instruction），ＣＭＩ（Computer Managed Instruction），ＣＡＬ（Computer Assisted Learning），ＣＢＥ（Computer Based Education），ＥＤＢＳ（Educational Data Base Sytem），ＣＴ（Computer Testing），ＩＣＡＩ（Intelligent CAI）といったものがあり、この特集号の中でそのいくつかが取り上げられている。

とくに今日、「教育工学」が重視される主要な理由としては、情報化社会の進展との関連をあげることができる。1970年代のマイクロエレクトロニクス技術やデジタル通信技術などの画期的ともいえる情報・通信技術の革新によって、コンピュータはパソコンやマイコンとして社会の中に入り込み、ネットワークを構成しはじめることになった。

そこで、1980年代に入ると、こうした情報化社会に対応する教育が、イギリスやアメリカ、フランスなどまさに世界的規模でなされることになった。

わが国も「情報教育」の名称のもとに、コンピュータを中心とする情報技術（ニューメディア）が学校教育の中に、近年かなりのスピードで入りはじめているのは、周知の通りである。

この「情報教育」においては、これからの社会に生きる子ども達にとっての教育やコンピュータ科学などサイエンスが、小学校、中学校、高等学校から大学に至るまで、発達段階的に基礎からより高度なものへと準備され習得されると同時に、いろいろな教科目の中で、今回の特集号で掲載されている多様なコンピュータ利用の教育方法や、教授、学習設計法などが用いられる必要がある。

今日の「教育工学」は、まさにこうした教育の実践課題に応えようとしているし、またそのための研究がめざましくなされているといってよいであろう。是非、本論でご確認いただきたい。